がら、ペタン派には《ファシズムへの親和性》は希薄であり、《「新しいヨーロッパ」の実現》という想定はＪＳＰと共有しているものの、そこにフランスがどう関わっていくのかという点については、両者の間に相違があることを明らかにした。ペタン派にはフランスをファシズム化させ、「ファシスト・ヨーロッパ」に同調させるという意図はなかったのである。

そして、ヴィシー期に熱心な協力主義者になるＪＳＰにも、戦前には「反ドイツ」という右翼ナショナリズムの重要な構成要素が明確に存在していたことに着目して、両時期における「フランス再生」の主張に見られる連続面と断絶面について概観した。《反共和国精神》と《ファシズムへの親和性》という二つの要素については、戦前からヴィシー期にかけて連続している。しかしながら、敵国ドイツの脅威に打ち勝つための国家再生を主張していた三〇年代とは異なり、ヴィシー期のＪＳＰは、その戦前の敵国の軍事力と国民社会主義という国家再生イデオロギーを拠り所にフランスの再建を主張している。この点において、ＪＳＰの国家再生の主張は断絶したものだったのである。

〈考古学部会〉

キプロスで生産されたBase Ring Wareについて
―新王国時代初頭のナイル川流域における交易活動の一側面―

山尾　和宏

一、はじめに

紀元前二〇〇〇年紀後半の東地中海地域には、大交易網が存在していた。キプロス島で生産されたBase Ring Wareは、レヴァント地域やナイル川流域などで数多く出土し、当時の交易品目の一つであったと考えられる。

Base Ring Wareは、後期キプロス時代に出現したとされるキプロス島の土器群の一つである。精製された粒子の細かい胎土を用いて、手捏ねによって整形されることを特徴としている。Base Ring Wareの中でもJuglet（以下、台付長頸壺）は、キプロス島だけでなくレヴァント地域やナイル川流域などの広範囲の墓から数多く出土し、副葬品としての性格が強い土器である。現在までのところ、台付長頸壺の出土は、ナイル川河口から約一四〇〇km上流までの地域で確認されている。

台付長頸壺がキプロス島からナイル川流域に流通した過程はこれまでは、ルクソール西岸に残された岩窟墓（TT162）に描かれた壁画などをもとに、台付長頸壺交易を担った私的な交易集団の存在

が解釈されてきた。しかし、現在までのところ、台付長頸壺がこのような集団によってキプロス島から持ち込まれた明確な証拠は発見されていない。そこで、考古学的な分析手法を用いて、この台付長頸壺がナイル川流域に流通した過程を考察した。

二、分析と考察

二―一、キプロス島とナイル川流域出土の台付長頸壺の差異

キプロス島で出土した二三四点を資料として、台付長頸壺を二系統、一六型式に型式設定した。その分類表を用いて、キプロス島とナイル川流域出土の台付長頸壺を比較した。その結果、両者に明確な差異が認められた。両者に明確な差異が認められたのは、特定の特徴を有する台付長頸壺が意図的に選択され、ナイル川流域に供給されていたことを示している可能性がある。台付長頸壺が生産された時代のキプロス島では、銅を精製して東地中海地域各地に輸出していたことが知られている。土器製作址の出現などから解釈すると、輸出目的で台付長頸壺が生産されていた可能性も考えられる。

二―二、トトメス三世の治世を画期とする出土量の激的な減少

先の分析において、輸出目的で台付長頸壺が生産されていた可能性を指摘した。そこで、ナイル川流域において、長距離交易(Long Distance Trade)により発生する出土時期の集中が認められないかを検討した。その結果、ナイル川流域出土の台付長頸壺は、第二中間期終末頃に出現し、第一八王朝トトメス三世の治世頃を最盛期として流通したことが判明した。一方、トトメス三世の治世の治世以後には急激に出土数が減少し、ほとんど認められなくなることが判明した。第二中間期終末頃から第一八王朝トトメス三世頃に年代付けられるのは、台付長頸壺編年の前半期に位置づけられる台付長頸壺であり、一四五点認められた。しかし、編年の後半期に位置づけられる台付長頸壺は、トトメス三世の治世頃から認められるが、わずか一三点にとどまった。

このような急激な変化は、長距離交易の衰退を示しているのではないか。第十八王朝トトメス三世頃までは、キプロス島からナイル川流域に安定的に台付長頸壺が供給されていたために高い流通量を維持できた。しかし、それ以降は何らかの理由で供給が停止したために出土が激減したのではないかと解釈することができる。

二―三、ナイル川流域における台付長頸壺の出土集中地域の存在

長距離交易においては、交易の中継や周辺地域への品物の供給をおこなう交易拠点が存在する。第二中間期末から第一八王朝トトメス三世の治世頃までにおいて、河口から二五〇―三〇〇km付近と六〇〇km付近に出土の集中が認められる。前者には、ヘラクレオポリス・マグナ(イフナシヤ・アル＝マディナ(إهناسيا المدينة))やグラーブ(ظرب)などの集落遺跡が位置している。後者には、アビュドス(アル＝アラーバ・アル＝マドフウナ(العرابة المدفونة))などの集落遺跡が位置している。また、トトメス三世の治世頃には、河口より二〇〇km付近のメンフィス(ミンフ(منف))でも出土数が集中する傾向にある。台付長頸壺は、これら集落周辺の低位砂漠に

形成された墓から出土しており、これら集落において台付長頸壺を獲得した可能性が高い。

前近代のアラビア語史料を解釈の参考にすると、ナイル川流域内陸部への輸送は、設備・保安などの理由から特定の交易港（Port of Trade）を介した交易であることを読み取ることができる。したがって、新王国時代においても、港湾施設や防御施設を備えた交易拠点が存在しており、そこを介して周辺部に品物が供給された可能性がある。

三、結論　―流通モデルの提唱―

キプロス島で生産された台付長頸壺は、小規模な交換の連鎖によって長期間かけてナイル川流域にもたらされた可能性は低い。むしろ、キプロス島とナイル川流域との台付長頸壺交易は、特定の交易集団によって組織的におこなわれていた可能性があると考えられる。

ベトナム中部の耳飾
―鉄器時代を中心に―

深山　絵実梨

一、はじめに

東南アジア・南中国を含む環南シナ海地域では、後期新石器時代から鉄器時代の墓葬に伴って多くの耳飾が出土する。特筆すべきは、鉄器時代になるとベトナム、タイ、カンボジア、マレーシア、フィリピンで同じ形状の有角玦状耳飾（突起を持つ耳飾）がみられるようになることである。なかでもベトナム中部サーフィン文化地域における出土量は群を抜いており、それらは多くが甕棺墓に伴い出土するものである。この事実は、サーフィン文化と環南シナ海地域の交流という観点と併せて多くの研究者に注目されているが、耳飾の分類に基づく編年研究等、基礎的研究が進んでいないのが現状である。

サーフィン文化の遺跡は海岸部の砂丘や河川沿いから見つかる墓地遺跡である。墓葬は縦に埋置される甕棺墓で、高さ一メートル近くある甕も珍しくない。人骨の検出は稀であり二次葬と考えられている。

副葬される遺物は、縄蓆文や彩色が施された土器、鉄器、青銅器、貴石製・ガラス製・貝製の装身具が中心である。

インドからもたらされたと考えられる遺物や中国の印紋陶土器も出土しており、両地域と交流があったと考えられている。

本発表では耳飾を分類し、その分類がどのような事象（時間的・空間的変移）をあらわしているのか明らかにすることを目的とした。

二、対象資料

ベトナム中部鉄器時代サーフィン文化の遺跡から出土した有角玦